

イギリスと日本

—その教育と経済—

森嶋通夫著

岩波新書

著者の森嶋氏は経済学者です。だからといってこの本は、経済情勢を分析・究明した型苦しいものではありません。ロンドン大学で教鞭をとり、教育者でもある氏は、この本を通じて、イギリスと日本両国内の教育と、教育が生み出す人々の経済活動、生活意識を見事に描き出しているのです。

その見事さは、氏が長らくイギリスの大学に籍をおいて、内側からイギリスの教育制度やその中身を知っていることからくるのでしょうが、私にはもう一つ、自然科学と異なり、正解のない問題を取

り扱う社会学者としての、人間の生き方への興味が息づいているからだと思います。

氏によるとイギリスでは、学生のもっているいろいろの資質を耕す、個人教育がなされていると言います。「学問とは方法を学ぶことであって、知識を集めることではない」との考え方に基つき、学生は高校から、自分の学びたい、少数の科目について、深く勉強します。そして大学でも、非常に多くの種類が用意された講義から授業を選択し、かつ個人授業を受け、個性的に育っていくというのです。

このように教育が成功すると、大学や大学院を卒業した優秀な人々は教育部門に留まります。それは何も教職の給料が高いからではありません。彼らはお金が儲からなくてもよいから、こんな楽しい世界に一生住んで、教育者となって、同

じような喜びを次の世代に与えたいと思ふようになるのだそうです。

そうなるも学生達は産業界へはゆかないります。日本の教育の悪さ、画一的教育こそが、学生を産業界に送り出し、日本の経済繁栄を築いたと、氏は言います。イギリスの経済不調は、教育の良さが原因というようになりますが、ある程度、衣食住が足りたなら、人々はお金より文化的楽しみを選ぶというでしょう。

日本でのその先駆者として、氏は漱石をあげます。漱石にみる高等遊民、個人主義は、英国じこみというのです。漱石が日本の将来を憂えたその心配は、これからますます色濃くなっていくことでしょう。日本の経済発展が頭打ちの現在、この本から日本の五十年先、百年先を思いをめぐらしてはいかががでしょうか。

(皆川美恵子)